特集

私たちのにしがま線 思いを乗せていつまでも

80年以上の長きにわたり、地域の暮らしを支え、人をつないできた名鉄西尾・蒲郡線。「にしがま線」と呼ばれ、親しまれるその赤い電車は今、存続の岐路に立たされています。

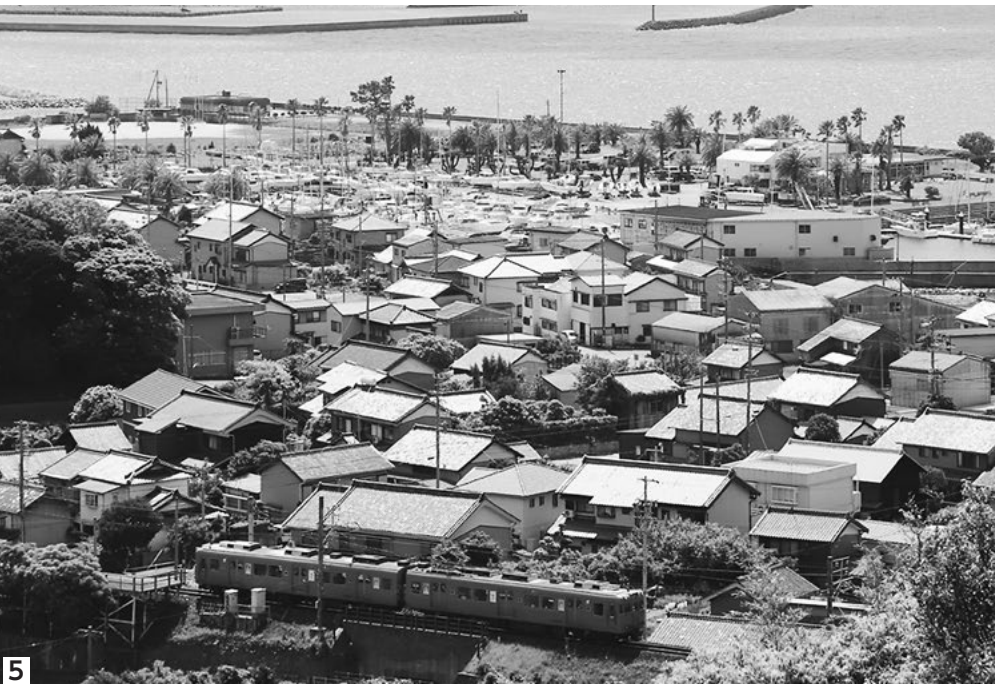
なんとしても廃線にしてはならない――。かけがえのない地域鉄道を守ろうと、未来へレールをつなぐ人々の熱い思いをお届けします。

2021年度以降の存続はまだ約束されていない

西尾駅から蒲郡駅までの、のどかな田園や海沿いの区間を走る赤い電車。「にしがま線」の愛称で親しまれる、私たちにとって最も身近な鉄道です。全長27・3キロメートル、駅数は13で、上下線とも1時間に2本運行しています。通勤や通学などの足として、西尾や蒲郡の市民生活に欠かすことはできません。

かつては三河湾に面した観光地に向かう電車としてにぎわい、多くの人々に利用されてきました。しかし、観光客は年々減少し、1997年に名古屋鉄道株式会社（名鉄）などがうさぎ島や猿が島をはじめ東幡豆駅周辺の観光事業から撤退。さらにマイカーの普及など時代の波に押され、利用者が減り続けます。そして今、にしがま線は存続の岐路に立たされているのです。

2005年11月、にしがま線の運行について「経営努力の限界である」と、名鉄は沿線自治体へ協力を要請します。この時、年間の利用者は約297万人。赤字額は約6億円に上っていました。これを受け、旧西尾市と旧吉良町、旧幡豆町、蒲郡市の4つの沿線自治体は名鉄と共に、同年12月に「名鉄西尾・蒲郡線対策協議会」を発足。その後、2007年度に年間利用者が約293万人まで落ち込み、対策協議会でにしがま線の現状と利用者増加に向けた取り組みなどが話し合われました。2010年11月の第8回協議会で、沿線自治体はにしがま線を維持するために名鉄に対して年間2億5000万円を、3年間にわたり支援することに合意します。支援金の内訳は、西尾市が1億5068万7000円、蒲郡市が9931万3000円。その後、2013年度からの3年間、2016年度からの5年間も同額を支援することが決定。現在2020年度まで路線の存続が決まっていますが、それ以降は約束されていません。



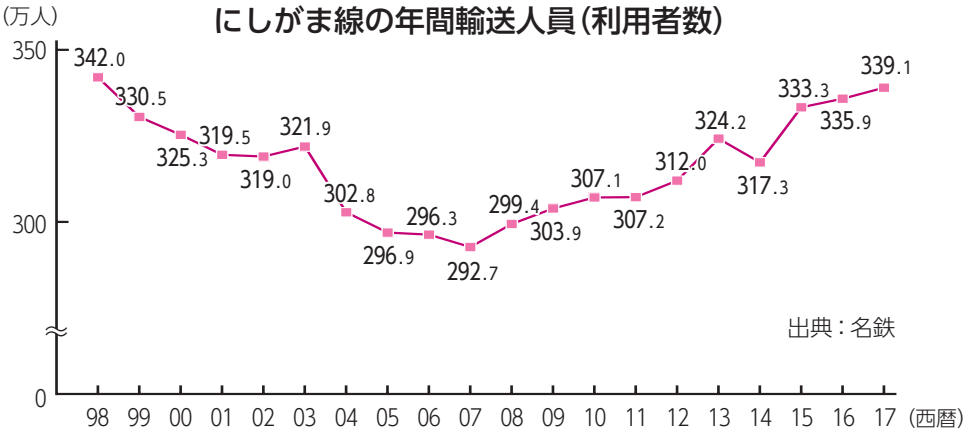
1／吉良町富好新田にて、稲垣貴司さん（上矢田町）撮影　2／鎌谷町にて、永野弘三さん（鎌谷町）撮影　3／東幡豆町にて、杉浦令奈さん（一色町）撮影　4／安泰寺（西幡豆町）にて、楯繁弘さん（楠村町）撮影　5／愛知こどもの国にて、杉浦弘都さん（一色町）撮影　6／鎌谷町地内から御嶽山を遠く望む

利用者を増やすための行政の取り組み

利用者を増やすため、行政はさまざまな取り組みを実行しています。

にしがま線の駅がスタートとゴールに設定されるウオーキングイベントとして人気なのが「はず夢ウオーク」。48回を数えるリピーターの多いイベントで、名所やイベントを見学しながら、幡豆地区に古くから伝わる民話の舞台を巡ります。

蒲郡市の竹島水族館と生命の海科学館では、にしがま線の乗車駅証明書を持参すれば、小・中学生の入場料が無料になります。冬には愛知こどもの国の駐車場に設けられるスケートリンクの滑走料が無料になります。さらに、親子や団体でにしがま線を利用すると乗車区間の運賃を補助する制度もあります。



さまざまな努力が実を結ぶ

存続を危惧し、動き出したのは多くの市民でした。「にしがま線応援団」をはじめ、さまざまな市民活動団体が発足。ウオーキングイベントや「鉄研」などのイベントを次々に打ち出します。

「自分が乗ってきた電車を、孫やその先に残さんと」「失ってから後悔しても遅い」。にしがま線やこの地域を愛し、未来に向けてこの路線を残したいという、熱い思いを持った多くの人が動き始めます。その熱意ある行動を行政もバックアップ。努力が徐々に実を結び始めます。

昨年度の利用者は約339万人。2008年度から10年にわたり増加傾向が続いています。まだまだ厳しい現状は変わりませんが、情熱を持って活動し続ける多く人の思いが、応援の輪を広げてきたのです。

Chapter 1

広がる応援の輪
みんなで守るにしがま線

存続を願い、市民が動き出す

私たちが鉄道を失うことは何を意味するのか――。その行く末を案ずる市民が立ち上がります。自分たちの生活を支えるにしがま線を廃線にさせまいと、2011年6月に「西尾市名鉄西尾・蒲郡線応援団（にしがま線応援団）」を発足。市内の33団体で構成する応援団は、年1回の名鉄西尾・蒲郡線利用促進大会や、ウオーキングイベントを開催し、にしがま線存続の重要性を切実に訴えています。

「孫たちのために残さんと。なくすのは簡単だが、一度なくしてしまったら、もう取り戻せんよ。鉄道がなくなったら地域は必ず衰退する」。そう話すのは、発足以来にしがま線応援団の団長を務める颯田洪さん（吉良町）。昔から地元愛が強く、通勤に利用したにしがま線への愛着と、地域のためにしがま線を存続させなければならないという強い使命感から、団長を引き受けたそうです。

「初めはみんなに『やっても意味ないで、やめときん』と言われたこともあった。でも活動を続けるうちに、いろんな人や団体が協力してくれてね。応援の輪が広がっとるね」。利用者は年々増加し、手応えを感じているという颯田さん。にしがま線を守りたいという熱意と地元への愛が、人と人とをつなぎ、応援の輪を広げています。

颯田洪さん

にしがま線の存続は、私たちの生活を守ることを意味します。鉄道がなくなったまちの姿を想像し、ピンチを迎えている今こそ、この問題に真剣に向き合わなければなりません。

二つのまちが協力することがカギ

にしがま線は西尾市民だけでなく、蒲郡市民にとっても重要な公共交通機関です。蒲郡市の「市民まるごと赤い電車応援団」は「にしがま線応援団」と共に、路線の存続と利用の促進を訴え続けています。代々の団長を務めてきたのは、蒲郡市の代表町内会長。現在の団長、尾﨑英行さん（蒲郡市形原町）は、「私が学生の頃は、毎日満員電車で大変だったよ。海のレジャー目当てに、電車でこの辺りに来る人が多かった」と語ります。自身や息子さんも通学でにしがま線を利用し、地域の足としての重要性を強く感じていた尾﨑さん。電車がにぎわっていた当時の様子をよく知っていることもあり、利用者が少なくなってしまった現在を寂しく思っています。

尾﨑英行さん

「にしがま線は蒲郡と西尾を走っている。この地域全体の問題だから、両市の住民が力を合わせていかないと」。利用促進大会やウオーキングイベントを共同で開催するなど手を携えて、路線の存続と利用の促進を訴えています。

にしがま線の廃線の危機は、一つのまちだけの問題ではありません。二つのまちが協力し、応援の輪を広げることで、にしがま線の利用者をいかに増やしていくかが、存続のカギを握ります。

1

2

昨年の名鉄西尾・蒲郡線利用促進大会　1／基調講演では、移住者の視点から、にしがま線やこの地域の魅力と課題が語られた　2／東幡豆小学校6年生はにしがま線の学習の成果をまとめ、パネルに展示

1／にしがま線体感ウオーク
2／形原駅前で行われた赤い電車応援駅前コンサート。蒲郡市ジュニア吹奏楽団の皆さんを中心に演奏　3／近隣高校のＰＴＡも体感ウオークを応援

通学の足をなくしてはいけない

毎日、多くの学生が通学で利用するにしがま線。もし廃線になってしまったら、最も影響を受けるのが高校生でしょう。

「生徒の通学手段がなくなるかもしれない」「にしがま線を守るために学校ができることは…」。そんな危機感や使命感から始まったのが、西尾高校の「名鉄西尾・蒲郡線体感ウオーク」です。こどもの国駅から西尾市役所までの約20キロメートルを、女子は約6時間、男子は約5時間かけて歩きます。毎年12月下旬に行われ、今年で10回目を迎えます。

桜町前駅が最寄りの西尾高校。2017年度は、生徒の39・7％が名鉄電車を利用し、17・2％に当たる185人がにしがま線を利用しています。「吉良や幡豆、蒲郡からも生徒がたくさん通っている。西高にとってもにしがま線はなくてはならない存在」と話すのは、同校で保健体育を教える新家正之先生(吉良町)。体感ウオークの開始当初から担当者として奮闘し、熱い思いで生徒たちを導いています。

にしがま線は西尾高校だけではなく、他校にとっても大切な通学手段です。体感ウオークの当日は西尾高校と同校のＰＴＡだけではなく、西尾東高校や鶴城丘高校、一色高校、吉良高校のＰＴＡも協力。約120人のボランティアが、チェックポイントで生徒たちを見守り、ゴールでは温かい豚汁を振る舞います。子どもたちの進学の選択肢を減らすまいと、保護者と地域が一丸となり、にしがま線を存続させるために活動しています。

「歩くと大変だと分かった」「電車がなかったら、西高に通ってなかったかも。今の友達にも出会ってなかったな」「後輩のためにも、電車を残さないと」。こんな声が毎年、生徒から出るとのこと。実際に沿線を歩くことで、鉄道のありがたさや地域住民の温かさを「体感」しているようです。体感ウオークはにしがま線の問題を自分事として捉え、地域の未来を考える機会になっています。

新家正之先生

Chapter 2

自分たちも楽しむ「鉄研」という応援の形

世代を越えてみんなで応援

西幡豆駅から徒歩5分ほどの幡豆いきいきセンターとその周辺で、毎年秋に行われる「鉄研」。子どもから大人まで楽しめるこのイベントを企画・運営しているのも、やはり市民です。「幼い頃からにしがま線に愛着を持ってもらいたい。地域が一丸となって応援していかないとね」と鉄研実行委員会会長の山本一義さん（吉良町）は笑顔で話します。にしがま線沿線に住む鉄道ファンとまちづくりに関わる約20人が集まって作り上げた鉄研は、今年で第5回を迎えました。第1回に約3000人だった来場者も、昨年は約5000人に増え、当日には約1000人が西幡豆駅を利用したそうです。

「にしがま線が廃線の危機と聞いた時は信じられなかった。存続のためにいろいろなイベントが開催されるようになったけど、子どもたちが楽しめるイベントもあるといいと思って」。そう語るのは、鉄研の立ち上げ当初から携わる筒井潔さん（吉良町）。デザイナーの筒井さんは、旧吉良町の職員に依頼され、にしがま線応援団のキャラクターを生み出します。そのことをきっかけに、親しんできたにしがま線を残したいと精力的に活動しています。

山本一義さん

「電車を利用する人が多くて当日は乗り降りに時間がかかったみたい」「子どもたちが夢中になって鉄道模型を見つめたり、キラキラした目で電車を見たりしてくれる」「来場者やボランティアが楽しんでくれるのがうれしい。楽しくないと続かないよね」と口々に話す鉄研メンバー。近隣の中学校・高校の生徒や地元の有志など、多くの人がボランティアとして鉄研に参加しています。自分たちも楽しみながら、参加者全員を楽しませる。だからみんな応援したくなる。そんな応援の形が魅力となり、たくさんの来場者を呼び寄せるのです。

鉄研実行委員会の皆さん。前列左から２人目が筒井さん、後列左から４人目が小笠原さん

2つの名物が誕生！

「イベントには名物になる食べ物が必要だ」。そんな意見をきっかけに開発されたのが、鉄研名物の「にしがまラーメン」と「にしがま焼そば」です。

「にしがま線が走る吉良や幡豆の特産品アサリを使った名物を」と試作が繰り返され、2009年ににしがまラーメンが誕生します。地元産のアサリをはじめ焼きのり、ネギをトッピングするなど、地産地消にこだわった逸品。「アサリの風味を感じられるスープがうまい」と好評です。

「一番苦労したのは、だし。アサリのだしを5種類くらい取り寄せたり、試作をお願いしたりして、どれが一番おいしいかみんなで決めた。使えないくらい匂いがきついのもあってね。作り上げたものは〝命のだし〟って呼んでる」と楽しそうに話すのは、鉄研でにしがまラーメンを担当している小笠原悟さん（東幡豆町）。鉄道の模型が好きで、にしがま線のために自分も何かできないかと、第2回の鉄研から参加しています。

にしがま焼きそばは「夏向けの商品を」と翌年に開発されました。〝命のだし〟で麺を蒸すため、アサリの味が強く感じられるのが特徴です。

この2つの名物をいつも食べられるのが、市シルバー人材センターが運営する「ごえん」です。西幡豆町のポートタウンミューの中で、午前8時から午後5時まで営業。火曜日定休です。切り盛りするのは、平均年齢70歳以上の女性たち。中でも最年長79歳の田中鈴代さん（西幡豆町）は、仕入れから厨房、ホールまで何でもこなす、ごえんの元気印。店の中は、ユーモアたっぷりの「田中節」でいつも笑いが絶えません。明るい店員の皆さんに元気をもらいながら、にしがまラーメンとにしがま焼きそばをぜひ堪能してみてください。

1／鉄研で人気の鉄道模型。リアルさに子どもも大人も釘付け　2／イベントで使う「にしがまラーメン」と「にしがま焼きそば」の屋台。小笠原さんのお手製
3／ボランティアの中学生も楽しんで参加

／1回食べてみりん！／

ごえんで働く皆さん。右端が田中さん

吉良高校鉄道研究部　僕たちが活動する理由

鉄道やにしがま線が大好きな生徒が集まる吉良高校鉄道研究部。毎年ボランティアとして鉄研に参加し、鉄道模型の操作体験の場を提供しています。「にしがま線を応援している実感が沸く。吉良高に通う後輩のためにも、にしがま線を残したい」と山﨑雄大（ゆうだい）さん（右／3年／奥田町）。「赤い車両は写真に映える」と小川祥吾さん（中／1年／緑町）。「にしがま線から見える海がすてき」と來彩奈（きたる）さん（左／1年／蒲郡市拾石町）。にしがま線の魅力を知るからこそ、楽しみながら応援しています。

Chapter 3

地域に根付く赤い電車
昔も今も魅力でいっぱい

にしがま線とともに歩んできた80年

東幡豆駅のすぐ目の前に店を構える中新本舗。1936年の創業以来、脈々と受け継がれてきた手焼きえびせんべいの味は、地元の方に親しまれています。看板商品はタコの姿焼き。捕れたてのタコを高温で一気にプレスし、うま味を閉じ込めた豊かな味わいで人気です。

「駅が近いからこの場所を選んだ。昔はみんな車がないもんで、西浦や形原からエビやタコ、魚を電車で東幡豆駅に運んでもらっとった。ある時、仕入れたタコが箱から逃げて、捕まえるのが大変だったよ。電車の乗客も『タコがあっち行った、こっち行った』って楽しそうだった」。そう話す2代目の尾﨑徹明さん（東幡豆町）は、今もなお現役の79歳。中学卒業後にえびせんべいの職人になり、60年以上焼き続けています。

尾﨑徹明さん

尾﨑高義さん

「春先は潮干狩り、夏場は海水浴客で電車は満員。東幡豆駅に特急が止まって、店の前の道も人がいっぱいで歩けんかったよ。この辺りに旅館も5、6軒あってね」。1957年に猿が島、1958年にうさぎ島が開園。東幡豆駅周辺は、三河湾に面した観光地としてひときわにぎわいます。1967年にパノラマカーがにしがま線を走り、座席指定特急「三河湾号」が停車するなど、多くの観光客が遠方から訪れていたそうです。

東幡豆駅周辺が静かになったのは、バブル経済が終わった平成の初め頃から。観光客やにしがま線の利用者が減っていきます。

「駅の周りには八百屋やいろんな商店があったけど、今はほとんど残っていない」と話すのは、3代目として店を切り盛りする尾﨑高義さん。大学を卒業後、会社員として働いていましたが、結婚を機に家業を継ぐことを決意。20年以上にわたり、店の味を守っています。

「地元の人がこの味を愛してくれている。この味を求めて名古屋から買いに来るお客さんもいる。材料が少なかったり、需要が減ったり、大変なことが多いけど、この場所が好きだし、のどかな景色や人の温かさに支えられてがんばれている」。駅前を行き交う多くの人とにしがま線を見つめてきた中新本舗。えびせんべいの香りが広がる店内には今日も、駅に到着する電車の音が響きます。

1

2

1／にしがま線を走るパノラマカー「三河湾号」。2008年、イベント列車として限定で復活した　2／近くに海が見られる東幡豆駅近くの踏切。少し下れば、海はすぐそこ

東幡豆町洲崎山付近にて、稲垣貴司さん撮影

手作りのイベントと蒸気機関車で地域を元気に

1日の利用者は平均約150人と、名鉄全線の中で最も少ないのが、こどもの国駅です。この駅から徒歩15分ほどのところに、愛知こどもの国があります。かつて入園者数の減少で悩んでいましたが、手作り感あふれるイベントや、本物の石炭をたいて走る双子の蒸気機関車「まつかぜ号」「しおかぜ号」が人気を呼び、市内外から多くの親子連れが訪れます。

イベント事業課でさまざまなイベントを企画している高橋健太朗さん（吉良町）は7年前、愛知こどもの国を運営するフロンティア西尾に入社。すぐに乗り物事業を担当することに。中でも力を入れたのは、故障中だった蒸気機関車しおかぜ号の復活です。「なんとしても修理し、双子の汽車として復活させたい」と、2015年からインターネットなどを通じて不特定多数の人から資金を調達するクラウドファンディングを利用し、修理費用を集めることに。遠くは東北や九州から資金が集まり、なんと1か月半という短期間で目標額の600万円を達成します。そして2016年11月、復活祭でしおかぜ号は元気に走り出し、多くの人を感動させました。

高橋さんは現在、イベントの企画・運営に奔走中。「予算がない中で、イベントを企画している。お客さんと接する自分たちだから、どうしたら喜ばれるのか分かる。時には子どもたちと思いっきり自然の中を走り回ることも。それが、うけているんじゃないかな」と自信たっぷり。「自分たちも楽しむ」ことをモットーに、毎年約50のイベントを打ち出しているそうです。

「年間約28万人だった入園者数が、今では約35万人まで増えた。蒸気機関車やユニークなイベントを目的に遠くからもたくさんの人が遊びに来てくれる。でも、こどもの国駅から距離があることもあり、にしがま線を利用する来園者が少ないのも事実。不便かもしれないが、景色や自然など、電車で来るからこそ分かる魅力がたくさんある。自分たちのイベントがにしがま線を利用するきっかけになれば」と高橋さんは語ります。こどもの国やこの地域を盛り上げるために、次はどんなことを仕掛けてくれるのでしょうか。のんびりと走る電車でこどもの国へ出掛けながら、沿線の魅力を探してみてください。新たな発見があるはずです。

高橋健太朗さん

絶対になくてはならない存在。

利用者の声　～Interview～

通学や通勤、レジャーなど、利用の仕方は人それぞれですが、全員に共通する意見は「にしがま線は絶対になくてはならない存在」であること。地域住民にとってにしがま線は、生活の一部なのです。

糟谷一景（いっけい）さん　　糟谷桂吾さん

西幡豆町在住の親子。43歳の桂吾さんの勤務地は豊橋。一景さんは三谷水産高校１年生、野球部に所属。二人とも通勤通学で毎日蒲郡線を利用している。親子共通の趣味は海釣り

息子と同じ三谷水産高校に通っていました。その時から現在まで27年間ずっと通学通勤で名鉄電車を利用しています。自分にとっては生活の一部。廃線なんて想像できません。駅員さんや車掌さんの対応に、いつも温かみを感じます（桂吾さん）。電車の中で中学校の時の友達と出会うと、懐かしさを感じます。帰りにスマホで動画に夢中になって乗り過ごした時は焦りました。毎日利用するようになり、電車のありがたさを感じています（一景さん）。

小田涼人さん

西尾高校２年生。蒲郡市西浦町在住。所属する野球部では内外野をこなす万能プレーヤー

にしがま線がなかったら、西高に通っていなかったかもしれません。文武両道のこの高校に後輩にも通ってもらいたいから、にしがま線は絶対に必要です。西浦駅での運転士さんの優しい対応は忘れられません。

にしがま線は子どもと出掛ける時によく利用します。先日、西尾市の親子利用補助制度を活用して、竹島水族館と生命の海科学館に行きました。親子で乗車すれば電車賃がかからないので、お得。蒲郡市が行う入場無料の企画も利用したので、小学生の息子は入場料もタダ。電車に乗ると、子どもたちは大喜びです。普段見る景色と違うし、お出掛け感があります。毎日利用してはいないけど、なくなって初めて大切さを痛感するはずです。子どもたちのためにも、ぜひ存続してほしいし、活動していきたい（勝信さん）。

深谷勝信さん、琉太楼（りゅうたろう）くん（右）、玄琉（げんりゅう）くん（左）

鳥羽町在住の親子、勝信さん42歳、琉太楼くん７歳、玄琉くん２歳。陶芸家の勝信さんは玄楼窯で備前焼や、地元の土を使った幡豆焼を手掛ける。平成20年、鳥羽の火祭りで神男を務めた

鈴木康生くん　　伊藤美和さん　　三浦あいさん

幡豆中学校３年生。高校受験を控え、毎日勉強に励んでいる。10月の名鉄西尾・蒲郡線利用促進大会で発表を予定。鈴木くんは西幡豆町、伊藤さんは鳥羽町、三浦さんは東幡豆町在住

修学旅行の時に西幡豆駅まで歩いて電車に乗りました。サッカーの試合に行く時に蒲郡線を利用します。大切な移動手段（鈴木くん）。小学生の時、子ども会で駅をきれいに掃除して、花壇に花を植えたのが思い出。存続のために自分でできることは、とにかく電車を利用すること（伊藤さん）。家族で出掛ける時はなるべく電車を利用しています。祖母はよく電車を使っているので、なくなると困ります。通学時に電車の音で時間を把握しています（三浦さん）。

大野隆男さん

70歳。東幡豆町在住。東幡豆名鉄電車存続のための利用促進の会代表。「鉄研」にも関わっている。

にしがま線の存続を願い、片道電車のちょこっとウォーキングを７年前から月１回開催しています。毎回30人以上が参加。健康にもつながります。２人いる孫が大きくなったら、にしがま線で高校に通わせたいです。

平山カオリさん　成瀬満美さん　岡田凪生（なお）さん

鶴城丘高校２年生の仲良し３人組。いずれも生徒会役員で、弓道部に所属。10月の名鉄西尾・蒲郡線利用促進大会で発表を予定。平山さんは寺津町、成瀬さんは戸ケ崎町、岡田さんは一色町在住

にしがま線で通学する友達がたくさんいます。みんなのためにも存続してほしい（平山さん）。にしがま線に乗っているとお年寄りに話しかけてもらうことがあります。地元の方とのふれあいが楽しい（成瀬さん）。弓道の試合や段級審査で、にしがま線を使ってよく蒲郡に行きます。廃線になってしまったら、バスになるかもしれない。弓道の荷物は大きいので、移動は相当大変だと思います（岡田さん）。

駅のそばに住んでいるから、小さな頃から電車を身近に感じてきました。踏切の音や電車が走る音は日常の一部。赤い電車を見るとほっとします。子どもと一緒に愛知こどもの国へ行く時に電車を利用します。車窓から見る景色は四季折々。電車に乗るたびに子ども心を思い出し、わくわくします。子どもたちも電車に乗るのが好きで、窓から外を眺めて陽気に浮かれている姿を見ると何とも心が和みます。にしがま線の良さは、こういうところにあります（祐介さん）。

中村祐介さん、桃華（もも か）ちゃん（右）、柚月（ゆづき）ちゃん（左）

西幡豆町在住の親子、祐介さん37歳、桃華ちゃん８歳、柚月ちゃん６歳。祐介さんは祐正寺の住職。はりきゅう院も営む。商工会青年部など、地域の活動に積極的に参加

鈴木一夫さん

83歳。西幡豆町在住。蒲郡線が題材の映像が、第２回碧海・西尾幡豆市民映画祭でグランプリを受賞

鉄道は山や川と同じで、その土地の風土の一つ。電車が走る音を時計代わりにしている人もいます。一度廃線になれば再開は難しい。仲間と一緒に乗車した蒲郡駅～西尾駅間の直通ラストランはいい思い出です。

あなたのにしがま線を思う気持ちが応援につながる

まちのシンボルとして地域に溶け込み、私たちの生活に欠かせないにしがま線。その行く末を危惧するたくさんの方の努力と情熱が少しずつ成果を生み、2007年度に約293万人まで落ち込んだ年間利用者数は、2017年度には約339万人まで回復しました。しかし、赤字路線という現実は続き、2021年度以降の存続は約束されていません。

電車の利用だけが応援ではありません。無理をせず、できる時に行動するだけでもいい。にしがま線を思う気持ちを持つだけでも応援につながります。誰もが応援団の一員になれるのです。

子どもたちの夢や青春を、これからもずっと運び続けられるように…。人生を最後まで豊かに謳歌できるように…。にしがま線を必ず残していかなければいけません。私たちの行動や思いは、未来につながる大切な切符です。